

禪學の構造

(下炬の場合)

對 本 愛 道

一

禪學には、どうしても或る、特殊な構造が考へられねばならぬのではないかと思はれる。尤も、禪學とは何ぞやとか言ふことになる、仲々問題が難かしくなつて來て、迎も我々では間に合ひそうにない。そう云ふ定義だては、夫々専門の學者にお願ひするとして、兎に角、禪學には或る構造が考へられる。大道無門ではあるが、千差有路に違ひはない。無門のところ有路である、筋道があるのである。筋道が、すぐに禪學ではないが、他の佛敎學とは相違した、或る筋道が考へられるのは事實である。之を、今假りに禪學の構造と言つてみる譯である。そして、之を考察するに當つて「下炬」を取出したのは、下炬が一般に語録や公案等と比較して、叙述的であるからである。即ち貴賤老若を問はず、凡そ死者に對する引導法語に該當してゐるからである。ところで、下炬と云つても、その形式に於て仲々多岐に涉つてゐる。試みに「弔靈語藪」をみると、月菴が法眞大師の爲に

せられたものとして、炬を以て棺を指し乍ら「是真耶是假耶、勘破了也」と唱へて火を擲下し、それで済んでゐるやうなものあれば、其他偈頌のみのもの、偈頌と著語とのもの、偈頌に言句を入れて著語で結んだもの等々色々ある。しかし現今では、大體四六文體のものを以て普通とされてゐるやうに思へる。そこでこゝでも、此の四六の例に依つて考察してみたいと思ふ。しかし單に糸口を出す程度だけであつて、誰方かに於て完成されんことを願ふ次第である。

二

そこで、一例を出してみたい。

七十餘年唯一機 錦心繡口極精微

忽然巧妙相忘去 促織數聲山月輝

伏惟 新歸元 ○○院○○○○居士

內包「韜略」 外表「德威」

愛截「斷生死流」 一子出家歸「佛門」

好施「行仁慈術」 一子學「醫侍親闈」

早悟「人間榮辱」 黃梁半熟夢

晚知「世上得失」 四十九年非

淨裸々　氣宇如王

赤洒々　獨脫無依

到這裡　說什麼兜率泥犁　格外領旨一枝華

說什麼頓漸半滿　徽外解音落韻詩

引金色頭陀微笑

喚文不識漢傳衣

清寥々白的々

孤迥々峭巍々

雖然與麼更有頑石未點頭以前一著施與居士去

瀉下金蓮一盃露　西風掃暑入紗幮

喝

(退耕語錄第二卷三十三丁)

大體之を三段にみて考へるのが普通ではないかと思ふ。即ち第一段として頌を、第二段として四六即ち起句以下落句迄を、第三段として喝を——斯う云ふ具合に分けられると思はれる。そして三段とも、結局のところ何れも同一なるものであつて、唯表詮の立場角度を異にするのみである。三段を總括して、一箇の全體を構成してゐると同時に、各段夫々に於ても亦一箇の全體が述べられてゐる。

る。即ち、夫々の一段が夫々に全體としての意味をもち乍ら、同時に大いなる全體に結ばれ、且つその構成因子となつてゐる、斯う云ふ風に承知されるものと思はれる。

假、下炬はその性質上、中に就いて生死の問題が主として取扱はれてゐるのは當然であつて、大體のところ、死に托して眞の生（不生不滅のもの）を引導指示しやうとするところに骨子があると思はれる。古來言はれてゐるところの下炬の五要（一徳二死三哀四活五奥）と云ふ様なものも、その根本は矢張り此處にあるのであつて、法理として云へば一生二滅三不生不滅と言つてもよいと考へられる。更に注意すべきことは、生と謂ひ滅と謂ふも、それは單なる生、單なる滅ではなくて、不生の生、不滅の滅の謂であると云ふこと及び、之は不生不滅に於ても亦適用されてゐる論理であると云ふことである。即ち此等の生、滅、不生不滅は三即一、一即三である譯である。この意味合ひが下炬全體に述べられてゐる。即ち頌に於ては大體「理」として、四六に於ては「事」に即して、喝に於ては全體作用として……。そうして、之は又、頌が體的であり四六が相的であり喝が用的であるとの見方をも成立せしめるやうに思はれる。

斯う云ふことをみた上で、三段の配列を眺めると、第一段は「理」第二段は「事」第三段は「理事無碍」と云ふ風にも考へられるし、又第一段は「體」第二段は「相」第三段は「用」と云ふ風にも考へられる。體相用と言ふ概念を使つた方が便利であるかも知れない。そこで、先づ體相用の配

列にあるものとして、次に夫等體相用の各々に就き更に考察を進めて行きたいと思ふ。

三

先づ、頌であるが、七十餘年唯一機錦心繡口極精微は〇〇居士の生涯即ち生の面を述べたものとみられ、次の忽然巧妙相忘去で死を、結句の促織數聲山月輝で不生不滅のところを夫々唱出されてあるとみられる。即ち生から滅へ更に不生不滅へ——この順序である。ところが前にも述べたやうに生は不生の生である。七十餘年唯一機錦心繡口極精微の語は、單に居士の生涯を一面的に述べたものだけではない。文字から言へば「唯一機極精微」の句で、實は本來底の意味が同時に表詮されてゐるのである。轉句に於ても、單なる死を述べたものではなくて、不滅の滅でもあることは「巧妙」の句で知られ、更に結句に於ては勿論「輝」の一字で蘇活する底あることが知られる。即ち何れも本來底から遊離した謂ではないのである。寧ろ、本來の不生不滅のところから、生と現はれ死と現はれたものであつて、結局不増不減「促織數聲山月輝」なのである。この間に、我々は矢張り理事用の概念を、その配列として視ひ得ると思ふ。尤も、それは大機大用としてあるから、直接の表詮語の上に於ては之を指示分類することは出来ない。直接の表詮語の上に於て、指示分類が出来るのは、生、滅、不生不滅と言ふ概念的角度的であつて、理事用と言ふ概念はその裏面に潜在するものである。之を試みに、横ではなくて、縦の體相用と言ふ具合にみて置いてよいと思ふ。

この縦の體、相用に加へて、横に生、滅、不生不滅の論理を示すのが、如上の頌の概念的構造と云ふ譯になるが、この論理と雖も、之を更に考察すれば、又體、相用、の形式となる。即ち、不生不滅と言ふことを中心に置いてみると、起承の二句は體を意味し、轉句は相を、結句は用を意味するといふられるからである。ところで、就中用に該當する「促纖數聲山月輝」は、頌が下炬全體からみて體、的な位置にある關係上、「喝」の如き全體作用とはその趣を異にし、所謂體、的な用として、此處に藝術的文學的方向を辿ると云ふことである。之は、頌全體にも適用さるべき點であつて、大凡禪に於ては、常に問題は「即今」に在り、概念的論理の世界に住しないことから、理として又は體として用ひるところ、それは自づから哲學的ではなしに、藝術的文學的の表詮となる、その結果である。但以上のところで、大體次のやうに言へると思ふ。即ち、頌に於ける構成として、縦と横とに夫々體、相用、の構造があり、前者には大機大用がその根底に置かれ、後者には「不生不滅の論理」がその根底に置かれてゐる。

或ひは、無理に此處まで分解する必要はないと思はれるかも知れぬ。しかし、禪學に於ては、譬へ一字一句と雖も珠玉なのであつて、單なる言句ではない。何れも本分に相應し、而もあるべきやうに位置してゐるものである。この文字の絶對性を理解する爲めには、どうしても相當程度の分解はなくてはならぬ。

四

次に、第二段としての四六文體に於けるものに就いて考へてみる。即ち、發句「伏惟」以下落句「瀉下金蓮一盃露西風掃暑入紗幬」までである。こゝに於て、正しく〇〇居士の居士相を中心としての垂示が施されてゐる譯であつて、下炬全體からみて相的であると云ふのもその爲めであつた。「伏して惟みれば」だけあつて、一見世俗的であり、敘述的である。又相的と言つても「新歸元」であるから、矢張り本來の分から眺められた相であつて、單なる傳記の類でもないことは勿論である。その骨子とするところは、頌の場合と同じく、生から滅へ、更に不生不滅への過程に外ならない。そこで、此の過程に應じて、大體之も三項に分けて考へられると思ふのである。即ち「到這裡」迄を第一項とし、〇〇居士の生涯のこと、「到這裡」以下「雖然與麼」迄を第二項とし、死の當體に、「雖然與麼」以下を第三項とし、蘇活のところを夫々述べたものとして、分けてみるのである。文面の説明は、素より此の小考の企て以外であるので、曩の頌に於けると同様之を省略して、直ちに構造に就いてみて行くことにする。

先づ、此等三項が、生、滅、不生不滅の配列にあることは、今みたところであるが、此等も勿論單なる生、滅、不生不滅ではなくして、生に於ては「淨裸々」「赤洒々」であり、滅に於ては「白的々」「峭巍々」であり、不生不滅に於ては「西風掃暑入紗幬」であることに於て、夫々不生不滅

の論理を持つてゐるとみられる。換言すれば、總じて「有りの儘」が妥當となつてゐる、生や恁麼、死や恁麼である。こゝに於て、矢張り此處にも縦の體、相用が考へられる譯であるが、此の場合には頗る場合では表面に現はれなかつたものが、判然と現はれてゐる。即ち、縦の體相用と言ふべきものが、此處では、そのまゝ横の體相用として表現されてゐるのである。居士相の立場を中心とした敘述である爲めである。居士相そのものを基底として、生、滅、不生不滅の各場合を通觀すれば生は「淨裸々赤洒々」なるが故に體、滅は「白的々峭巍々」なるが故に相、不生不滅は「西風掃」暑入三紗幃」なるが故に用と云ふ具合に該當せしめ得る。即ち、第一項から順次に、體相用の配列にあることを知るのである。之は、大機大用が文字の相を借りて、相的に作用する爲めであつて、一見「説明」の色彩を帯びてゐる。一般に「親切丁寧」とか「老婆親切」とかはれるのも、斯うした場合を謂ふ譯である。この「親切丁寧」は、更に各項目に於て、夫々又體相用の三目に涉つて施されてゐることを我々は結論としてみる事が出来るのであるが、之は考察過程を省略して、次のやうに唯指摘して置くに止めたい。

第一項 内包韜略外表德威

愛截斷生死流一子出家歸佛門

好施行仁慈術一子學醫侍親闈

(體)

(相)

早悟人間榮辱 黃梁半熟夢

晚知世上得失 四十九年非

淨裸々 氣宇如玉

赤洒々 獨脫無依

第二項 到這裡說什麼兜率泥犁格外領旨一枝華

說什麼頓漸半滿微外解音落韻詩

引金色頭陀微笑

喚文不識漢傳衣

清寥々 白的々

孤迥々 峭巍々

第三項 雖然與麼更有頑石未點頭以前一著施與居士去 (體)

瀉下金蓮一盃露西風掃暑入紗幮 (相)

喝 (用)

斯うしてみると、相としての此の四六文體に於て、そこには相としての體、相用が配列されて居り、その配列は縦の體、相用と横の體、相用との一致であること、即ち大機大用を基底とする表顯が、

不生不滅の論理を基底とする表顯と一致してゐること、更にその一致の故に、各々の體、相、用、に更に體相用の構成を持つに至つてゐることが、結論として現はれてゐると思ふ。之を第一段に於ける體としての體、相、用、の場合と比較すると、體の場合には表詮が文學的であるが、この場合には説明的となつて居り、又體の場合は縦の體、相、用、と横の體、相、用、とが表裏二を作してゐたのが、この相の場合には表顯して一體となつてゐること、及び一體の故に更に細かく横の體、相、用、が展開されてゐること等が知られると思ふ。一應、この程度にして置いて、第三段をみやう。

五

第三段は、表面非常に簡單である。唯一喝でそれで全體である。尤も「喝」は第二段第三項にもその第三目として、一度取上げてみたのである。即ち、向上の一著子としての著語「瀉下金蓮一盃露西風掃暑入紗幬」の終止符として、その當體の表顯として、便宜上みて置いたのである。しかし、この「喝」は當初に言つたやうに、全體作用なのであつて、それ一箇を以て全體としての意味が具備されてゐるものである。即ち體相用の悉くを、その中に意味として持つてゐる。未だ他に言ひ方もあると思ふが、今迄使つて來た概念からみると、大體そ言ふ風に述べられてよいと思ふ。體、相、用、を具備した上での「喝」である。向上底の「一口吸盡」である。であるところから、此の第三段は前二段の體、相、に對して、正しく用に位置すると同時に、それ自體の裡に更に體、相、用、の配

列することを肯定せしめられる。その内部的な方面に就いて言へば、縦にも横にも體、相用は配列されてゐる譯である。縦にも横にもある筈ではあるが、何れのものも用としての體、相用であるが爲めに、表面之を窺ふことは出来ない、つまり、大機大用そのものであるが爲めに、大機大用を基底とする體、相用の區別もみることが出来ないし、又不生不滅の論理を基底とする體、相用の區別もみることが出来ない。示されてゐるのは、唯「看々」の世界のみである。

以上のところで、一應下炬全體を通して禪學としての構造を考へてみると、那一箇が體相用に展開しつゝ、その各々の體相用に於ても那一箇の面目を保持しつゝ更に體相用の構造に展開する。展開しつゝ、それが那一箇の面目を保持するところに一の全體を結成する。一の全體を結成するところ、實は那一箇に還元してゐると云ふことを知る。即ち、禪學は先づ、展開であり乍ら同時に還元であるところの意味を持つ。そして、その展開であり乍ら同時に還元である爲めの構造として、禪學は立體幾何學的形式を持つ。即ち、横の體相用が縦の體相用に即しつゝ更に體相用と展開、之が又相應する縦の體相用に即しつゝ更に體相用と展開すると云つた構造である。この縦の體相用が常に横のそれを即應せしめてゐることに、禪學として、他の佛敎學と相違した點として、特性づけることが出来ると思はれる。そこで、此の縦の體相用に就いて、もう少し考へてみることにする。

縦の體相用は、大機大用の側である。禪學が單なる學問ではなしに、禪學として意味をもつてゐるのも、唯この縦の面を具備するが故だとも考へられる。一般に概念はそれ自體他の概念を采み、又他の概念に制約されることから、單なる概念の世界は、永遠に同一平面を彷徨するに止まる。しかし禪學に於ては、常に飛躍がある、平面の世界はそれの一部ではあるが、決して全體ではない。全體は平面ではなくて、寧ろ立體的である。成程、體、相、用と云つたことは、一般でも考へられる。本質、形相、作用は如何なるものに就いても容易に考へられる要素なのである。しかし、考へられてゐる面は、結局唯平面上のことに過ぎない。例へば、机と云ふものを假に考へて來ても、その本質や形相や作用やは、誰しも容易に考へることが出来るかも知れない。出来るかも知れないが、何が机になつたのか、何故机になつてゐるのか、畢竟机とは如何と言ふことになると、誰しも考へは及ばない。換言すれば、机から出發することは出来るが、机を意味付けてゐるものゝ世界から出發することは出来ない。この机を意味づけるところの世界が、禪學の基底であり、その意味づけに、體相用の角度を持つてゐる譯である。何が机になつたのか、何故机になつたのか、畢竟机とは如何、こう云ふ點が縦の體相用の面なのである。此の縦の體相用が、禪學に於ては常に具備されてゐるが爲めに、概念の世界に停住することなしに、「即今」の世界を常に確立すると云ふ譯である。

曩の頌に於て、前三句に比べて結句「促織數聲山月輝」は著しく飛躍的である、飛躍的であると同時に「即今」的である。不生不滅を理として述べたものが、之であつたことを思へば、禪學に於ては、理と雖も單なく理ではなくて理事無碍の理であることが了解されやう。之は、體相用が横に展開したと言ふだけでは、此の結果は得られないのであつて、寧ろ縦の展開が主になつてゐるが爲めの結果である。次の四六文體に於ても、落句「瀉下一盃金蓮露西風掃暑入紗幮」は、不生不滅を事として述べたものであつたが、之も「淨裸々」や「白的々」と比べると、著しく飛躍的であると同時に「即今」的であつて、單に平面的なる配列としての體相用上の位置には居ない。「轉身の一」とか「向上の一著子」とか言はれ、こゝでは「頑石未點頭以前の一著」と言はれてゐるが、之が無ければ、禪の宗旨はないとさえ言はれる程、重要視されるだけあつて、配列上にも一見特色を帯びてゐることが知られるのである。最後の一喝、この「喝」も前の四六や頌に於ける趣と比べると、全く思路を絶してゐる。單に用として規定出來ぬ程飛躍的である。既に、前二種が言句であるに對して、之は行爲とも言ふべき性質である。月庵禪師が「是真耶是假耶、勘破了也」と言つて、遂に炬を擲下したと言ふ、その炬を擲下するところと同一規に在るからである。

斯うしてみると、曩に禪學の構造として、體相用の立體的展開が言はれたが、その展開は、實は用を中心とした展開なのであつて、用が用に卽し乍ら、縦にも横にも體相用と展開する——大體か

う云ふ風に見られなければならないのではないかと考へる。そして、その立體的構造體は、大にしては天地と同一體となり、小にしては一毛頭に歸する。そこ迄は暫く措くとして、この體相用の立體的構造體に於て、縦横の交錯點が、平面上にも立面上にも無數に考へられる。此等の交錯點の或る點に禪文學が位置し、或る點に禪哲學が位置し、或る點に「作用」が位置し、其他諸種の禪文化が夫々の點に位置すると言ふことになる譯である。臨濟錄に出て來る「三玄三要」の意味する構造——一句語に須く三玄門を具すべし一玄門に須く三要を具すべしとある垂示より我々が得られる概念的構造——が、矢張り同様なものであつて、此の「用を主體としての體相用の立體的展開」と云ふところに、禪學の構造が考へられるのではないかと思ふ。尤も言ひ盡せぬところもあり、問題も色々残つてゐるやうではあるが、極く大雜把にみて、大體以上のやうにみられるのではないかと思ふ。

(六、三〇)